

宗祖弘法大師青葉祭祭文

新緑したた滴り薫風香る五月さつきの本日、茲ここ当山安養寺観音堂において真言宗立教開宗弘法大師空海聖人のご生誕を祝し、青葉祭りと称して執り行う。

今、世界中の人々が新型コロナウイルスの急速な感染拡大あんだんによつて、不安と混乱の極みにおかれ暗澹あんだんとしている。人類は、これまでもたびたび予期せぬ戦争や災害、疫病など、未知との困難に遭遇し闘い、生き延びてきた。そのなかで、いま、私どもが直面している敵の特徴は「目に見えない」ことで、不気味に迫ってくるのである。一体、私どもは何を基準にして生きていけばよいのか、これまでの価値観を激変させる可能性さえ問われている。

今回、当山安養寺熊谷俊亮住職は、当山の重要な年中行事の一つ弘法大師ご生誕青葉祭りを執行するにあたり思案を尽くされた。ご参詣の方々お身のことである。政府・都道府県は感染予防対策に密閉、密集、密接を避ける³密³を提示しているからである。

おもんみれば、安養寺の本拠 精舎は一万余坪の広大な境内にある。山林樹木の生い茂る大自然の懐にすっぽり包まれている。中心のご本尊さまは薬師如来。病苦の衆生の苦を救い、無明の痼失こしつ、つまり久しく直らない病気を癒いやされる。十二の大願を発してことごとく成就され如来さまになられた

靈驗あらたかな本尊さまが鎮座まします。その上、寺歴を

さかのぼ

溯れば弘法大師が中興の祖と仰がれている。まさに真言密
教承継の古刹である。弘法大師の導きは、この身このままに
仏になるという「即身成仏」の信仰である。即身成仏を目指
すためには、日々の生活において、自分のこの身と口、つまり
言葉、そして心の業はたらきの三つの三密を修行するのが大切であ
る、と説かれている。コロナ予防の「三密」は小池東京都知事
の造語であるが辞書に出典されている三密の本来の言語は、

密教の教えとしてきっちり明示されている。このように身、口、

みくち

意い（心）の三密は自分の体、言葉使からだい、心を見つめ直し、意
識的に自分の中に流し入れる時間を伸ばすことが修行なので
ある。それが皮肉にもコロナ疫病の感染予防で生まれた密閉
空間、密集、密接の「三密」の関わりを避けなければならぬ
だけに、ある意味では、「心の分断の危機」とも思える。

この際、災難を乗り越えて次に進む助走として提案したい
のは、外部にふりまわされず、自分を見つめ直すチャンスとと
らえる。長丁場のこれからもよく「般若心経」を唱え、身口
意の三密にしみ込ませ、人との「分かち合う」心使いを、育て
たいものである。

弘法大師は般若心経の功德を次のようにお示し戴いている。

じゅじこうく

誦持講供すれば、則ち苦を抜き、樂を与え、修習思惟す

しゅじゆしゆい

れば、則ち道を得、通つうを起す。甚深じんじんの称誠しんじやうに宜しく然るべし」
大訳すると、読誦したり、受持したり、講説したり、供養し
たりすれば、浮世のさまざまな苦しみからのがれ、安樂を得
ることが出来る。またさらにそれを修習し、それについて思惟しゆい
したりすれば、奇跡が起こり、最終的には悟りに行き着くこ
とも出来る。こういうわけで、教えだけでなく、功德の点でき
わめて勝れた經典である。そこで經典に「行深般若波羅蜜多」
と称賛しているのも、まことに当を得た評価だ、ということが
出来るであらう」と。

以上、茲に本日の佳辰をほくとして宗祖弘法大師聖誕の瑞祥
を祝し奉る。国難といふべきコロナ禍の収束を乞い願ひ、宗
祖大師に懇念を照覧し給う。

重ねてかさ乞う。

天下泰平 五穀豊穰 万民快樂

世界平穩 乃至法界 平等利益

令和二年五月十七日

向日市寺戸町

亀光庵沙門 土口哲光

敬白